



新潟大学
旭町学術資料展示館
Niigata University
Asahimachi Museum

あさひまち

新潟大学旭町学術資料展示館ニュースレター 第20号 2022年6月
ISSN 2185-7431

コロナ禍の展示館・そしてその後の展示館

新潟大学旭町学術資料展示館 館長 丹治 嘉彦

令和2(2020)年4月、新型コロナウイルス感染症対策のため緊急事態宣言が全国に発令され、生活の維持に必要な行動以外極力外出を控えることが求められました。いわゆる移動の自由が制限されるとともに、人と人が接触することが事実上できなくなったのです。これによって、新潟大学旭町学術資料展示館（以下、展示館）を利用する大学関係者、また市民にも展示館利用に制限がかかってしまい、それまで交流の場として賑わっていた展示館でしたが、臨時休館のためひっそりと佇む時間が続くことになりました。令和2(2020)年6月の再開後も特に展覧会をより深く理解するための講演会や作品解説といったラーニングプログラムを縮小することになり、展示館における来場者数にもその影響が出てしまったことは言うまでもありません。しかしながら、このコロナ禍だからこそできることを模索し、そこで展示館の立ち位置をあらためて確認するとともに、この空間でしか表現できない物語を演じることを考えました。例えば展示資料をじっくりと鑑賞してもらいそれらをより深く知ってもらうこと、そして

沈思黙考するにはまたとない機会となりました。また、来るべき日に備えて館内を鑑賞者の目線に立って整備することもできます。いわゆるこのコロナ禍において展示館のあるべき姿に対して初心に返って思考することが可能となったわけです。とは言え、展示館に大学の教職員・学生そして市民が来場し、鑑賞してもらうことでその存在意義が高まります。例えば、展示資料を鑑賞しながらそれらについて意見交換の場ができたり、展覧会企画者が作品解説を行うトークプログラムでは、オーディエンスとの積極的なやり取りが生まれますが、これらのプログラム、いわゆる開かれた展示館を示すことができないことは口惜しい限りでした。

今後現状が収束した後、この状況を糧として、展示館に大学関係者そして市民に足を運んでもらうことにより、まだ知らぬ価値観に触れ想像力を掻き立てることに一役を担うことは展示館における大きな使命となります。そして、これらを提供する場としての展示館は、新潟大学の「知のゆりかご」として社会に対しての責務でもあるのです。



企画展「殻」展

2021年7月21日～8月29日

大学院自然科学研究科(2022年3月修了) 新田 真理

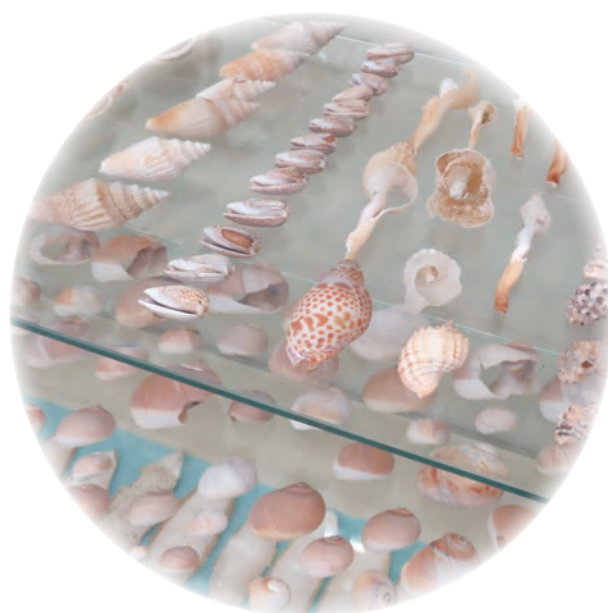
一口に「殻」といっても様々な生き物の殻がありますが、本企画展では、五十嵐浜で採取された海洋生物の殻を中心に展示しました。二枚貝の殻、巻貝の殻、そして節足動物や棘皮動物の殻。展示ケース内に所狭しと敷き詰められた数々の殻は壮観です。

馴染みのある貝殻でも、その種を正確に見分けるのは難しいものです。殻の外形、模様、肋の本数といった特徴を把握することが重要になります。本企画展には佐渡の地層から産出した化石も展示しましたが、軟体部の残らない化石においてはさらに、殻の特徴が分類する上での貴重な手がかりです。また、殻の形の違いは生態の違いとも関連します。沢山の殻を見比べることで、その細かな形態や五十嵐浜にすむ生物種の多様さを実感していただきたいとの思いから、今回の展示は多数の標本をぎっしり並べるような形となりました。また体験の場として、五十嵐浜でとても多く見つかる代表的な貝、サルボウとサトウガイを見分ける腕試しコーナーも用意しました。

会期中には対話型オンラインイベントも企画し、7月31日には「おうちでミュージアム」、8月7日、21日、28日には「ミュージアムの大学生と話そう!」を開催しました。「おうちでミュージアム」は県内の博物館と合同で糸魚川・佐渡・苗場山麓ジオパークを中継し、各館の展示紹介を行いました。「ミュージアムの大学生と話そう!」では「殻」展来館者にご参加いただき、新潟大学サイエンスミュージアム解

説員による研究紹介や「殻」展へのQ & Aを行いました。両イベントとも、参加者から多くの質問やコメントが寄せられており、展示物に関する理解が深まったのではないかと感じます。

このようなオンラインイベントの企画運営は今までにない取り組みでしたので、試行錯誤しながらの開催となりました。他の博物館の方々や解説員のみなさんとアイディアを出し合う中でより良い開催手順や話し方等に気付きました。また参加者との対話をきっかけに私自身の殻に対する理解が深まることもあり、大変勉強になったと感じています。ご来館された皆様にも、本企画展をきっかけに「殻」の魅力を感じていただけたらと思います。



企画展「甦る山古志の民具」

2021年9月18日～10月24日

人文学部 飯島 康夫

今回の企画展は、平成16(2004)年10月23日に起きた中越地震で被災した旧山古志村民俗資料館に所蔵されていた民具資料の整理が、令和元(2019)年度に終了したことを記念して開催したものです。当初令和2(2020)年度に開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大により1年延期しての開催となりました。

被災した民具は地震の翌年平成17(2005)年5月に倒壊する危険のあった民俗資料館から救出され、その年の8月から新潟大学の博物館実習の一環として資料整理が始まりました。



整理作業は15年にわたり、この間、240名の新潟大学の学生が作業に携わり、2,080件の資料が整理されて新たな資料台帳が作成されました。地震から15年を経て、ようやく山古志の民具が博物館資料として甦ったのです。展示名にある「甦る」はその意味です。そこには「甦る山古志」という思いも込められています。

整理された民具は、いずれも山古志の生活文

化の証としての歴史的価値を持ち、同時に中越地震の被災資料としての歴史的意味も併せ持っています。2,080件の中から展示資料を選ぶのは難しいことでしたが、かつての山古志の生業に関わる47点の民具資料を5つのテーマ「米をつくる」「蚕を飼う」「鯉を育てる」「牛を飼い、牛で遊ぶ」「苧を績む」に分けて展示しました。生業は、山古志の豊かな自然と人々の生活との接点だからです。

展示にあたっては、民具が引き立つように明るい緑色の展示台を自作しました。また、民具を用いた生業の様子を視覚的に理解するために、山古志の生活を長年撮影してきた片桐恒平氏の写真(にいがた地域映像アーカイブ・データベース所蔵)を大きく引き伸ばして展示の背景として設置しました。

大学の博物館経営論の授業でも博物館の活動事例としてこの企画展を取り上げ、企画から展示制作までの流れと展示意図などを解説した後、聴講学生に任意で見学し批評してもらいました。結果、多くの学生から厳しくも温かい的確な批評が寄せられ、学生たちの学習成果を再認識すると同時に、自らの講義内容を実践する機会ともなりました。

開催期間中、複数の報道機関に企画展のことを取り上げていただき、315人の観覧者を迎えることができました。観覧していただいたみなさまに感謝するとともに、資料の所蔵者として後援していただいた長岡市教育委員会、また、展示に協力していただいた方々に心から御礼を申し上げます。

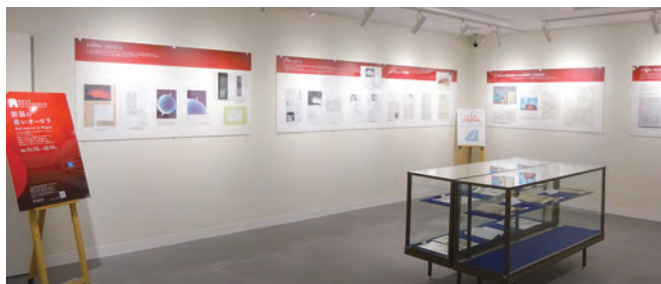


企画展「新潟の赤いオーロラ」

2021年11月13日～12月19日

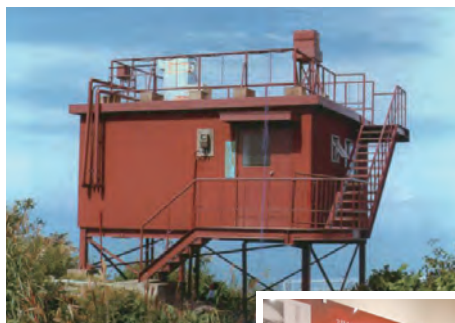
教育学部 非常勤講師(元 新潟県立自然科学館 学芸員) 中沢 陽

日本には「星月夜」という美しい言葉があります。星あかりで月夜のように明るいという意味ですが、その正体の主役は星そのものの光ではなく、上空100km以上の高層大気中の酸素原子からの発光です。そんな大気光を昭和32(1957)年から平成3(1991)年まで、長期にわたって観測を続けた新潟大学の観測所が弥彦山頂にありました。しかし建物の老朽化のため平成30(2018)年に解体されました。また太陽からの強大なエネルギーが直接注ぎ込まれることで大気光が増強し、稀に新潟でも赤い「低緯度オーロラ」として観測されることがあります。事実、昭和33(1958)年2月11日、大規模なオーロラが出現し北海道をはじめ東北、北陸、中部(長野)、関東の各地で観測が報告されました。当時の新聞は新潟大学の分光観測の様子を詳しく報じています。さらに、平成元(1989)年10月21日のオーロラは北海道や東北地方に出現し、新潟市でも肉眼では見えなかったものの、新潟大学のチームにより写真撮影、分光観測がなされました。



本企画展では、当時のオーロラ観測記録や観測所の資料などを多数展示しました。なかには、1958年のオーロラに関して、当時の子どもの頃の記憶を確かめようと来館され、感慨深くご覧になっていた方も多くいらっしゃいました。低緯度オーロラ発生機構の解明が進む中で、大自然の神秘や不思議さと真摯に向き合った研究成果は、日本のオーロラ研究に大きく貢献したと同時に、新潟大学の宝と言えると思います。

最後になりましたが、日々の来館者の対応に丁寧にあたっていたいただいた展示館の清水学芸員に感謝すると共に、教育学部の伊藤克美教授(物理学)をはじめ、本展の開催にあたりご協力賜りました学内外の皆様にご心より御礼申し上げます。



▲ 超高層大気光観測所
(弥彦観測所)



企画展

「めでたい形 - あさひまち展示館のひなまつり -」

2022年2月19日～4月3日

あさひまち展示館友の会 坂井 百合子

旭町学術資料展示館の改築を経て二年ぶりの「めでたい形—あさひまち展示館のひなまつり—」が開催されました。永吉秀司先生(教育学部)の収集された郷土玩具や新潟市の豪商・田代家で大切にされてきた大正時代の段飾りを中心にした展示に、「あさひまち友の会」会員二名も協力させていただきました。

近頃は、各地でひな祭りの展示が行われるようになり、それぞれの家で大事にされてきたひな飾りを見ることができるようになりました。その際に、ひな人形と一緒に家中のお人形も並べられているのもよく見かけます。

今回展示された我が家のものも、昔はひな壇の周りに並べていた人形たちです。中でも小さな陶人形は長い間しまいっぱなしにされ忘れられていましたが、最近家の片付けの時に再発見し今回の展示となりました。これらは旧栃尾市(現長岡市)にあった父の実家より受け継いだものです。大正から昭和の初めの頃のものと思われる、恐らく約百年の年を経ています。この人形たちがどのように山深い町にやってきたのか、どのように遊んだりしたのかを知る人はもうおりません。親たちの子供へのお土産だったのか、柳行李を担いだ行商の人が持ってきたのか

企画展「中村恭子日本画作品展『書割少女』」

2022年1月8日～2月12日

九州大学大学院芸術工学研究院 中村 恭子

本展では、日本画家の中村恭子による作品展として、軸作品10点を公開しました。

日本画とは、岩を粉末状に砕いた岩絵具、土などを精製した水干や泥絵具、植物の染料といった、天然素材の絵の具を膠という接着剤で和紙や絹に定着させる絵画技法です。中村は日本画を描く画家ですが、その制作は、絵画を目的とするものではありません。創造性とは何かという問いを、自らの日本画を描く制作を契機として示す研究を行っています。

知覚世界の外側である「外部」が降りてくる仕掛けをつくるのが、創造行為の要です。その一つの具体的な方法として、中村は平成30(2018)年頃より、日本画の古画に見られる「書き割り」と呼び得る空間概念を題材に描いてきました。書き割りとは、舞台背景装置のハリボテのことです。琳派などによくみられる緑色の半円の図形のような山並みは、抽象的でありながら現実の風景を成す、一枚の板のような山の連なりで表現され、それはまるで書き割りの山

が立ち並ぶようです。書き割りの山は、紙人形の裏側の割り箸を背後に控えているようなもので、裏側がない、つまり山の向こう側が無いことを示しています。書き割りの空間概念は、単純な遠近空間を問題にせず、外部を問題にした写実感覚なのです。この考えがさらに展開して、「人も書き割りになる」ということを構想し、南米チリの墓碑や南米最南端の失われた民族の精霊、スペイン語圏辺境地域の祭、そして中村が出会った身近な少女たちから着想を得た制作と論文を執筆しています。

ぺらぺらの類型となることで、あらゆる視中心を通して引かれる線上で設定されるこの世の傾向から、徹底回避する意志とは何か。本展では、風景の書き割りから端を発して、書き割りとしての人間の生を示す新作を中心に、書き割りから見出せる「個性性」、「異質性」、「潜在性」などの創造性にまつわる根本問題を追求しました。

▼ 360度カメラで展示室を撮影



など想像してみる他はありません。形もいろいろで当時の風俗をしのばせるものもありますが、今では忘れられた何かのエピソードを持っているのではないかなと思わせるものもあります。さしずめ今の言葉でいうところのフィギュア、またはキャラクター人形といったところでしょうか。その頃の人たちがこれらの

人形にどのような思いを託していたのか考えてしまいます。

もう一人の会員、岡元正子さんの素晴らしい人形や羽子板のコレクションとともに展示していただき一層充実されたことは幸いでした。楽しんでご覧いただけたでしょうか。



常設展示室より－旧制学校時代の歴史的実験機器－

旭町学術資料展示館 清水 美和

常設展示室では、新潟大学が所蔵する貴重な学術資料を展示しています。今回は1階「自然・技術の歩み」展示室より、新潟大学の前身校である旧制新潟高等学校(大正8(1919)年開学)および旧制長岡高等工業学校(大正12(1923)年開学)から伝わる歴史的実験機器を紹介します。



①心理学実験機器

旧制新潟高等学校で開学翌年から7年間、心理学の教授を務めた黒田亮が授業や研究に使用した知覚能力測定機器を中心に展示しています。



◀落下式瞬間露出器
(タキトスコープ)
[安藤研究所製]

電磁石でつり上げた天板がスイッチを切ると落下し、文字が書かれた板を覆う布が外れ、天板の窓部分から板に書かれた文字を瞬間的に提示します。現在のタキトスコープは、モニター画面に出る刺激をパソコンで制御する仕組みとなっています。



◀キルヒマン氏混色器
[株式会社 島津製作所製]

円盤状の色紙を回転させることによって混色を生み出す装置です。現在の実験でも原理的には同じ装置が使われています。

②物理学実験機器

旧制新潟高等学校・旧制長岡高等工業学校両校に由来する実験機器です。

興味深いのは、旧制新潟高等学校に由来する機器は基礎的な実験機器が多い一方、旧制長岡高等工業学校は当時の最先端分野に関わる実験機器が多く、共通する物品が極めて少ないということです。両校の教育理念の違いがうかがえます。



◀水銀蒸気整流器
(旧制新潟高等学校)
[マツダ製]

真空にしたガラス管内で水銀を陰極として放電する時のみ、電流が流れることを利用した機器です。当時は直流電源を得るのが難しく、校内の電池室に設置された100Vと20Vを配電する大容量の電池を充電するためこうした大型の整流器が使用され、講義や実験でも活躍していました。展示室でひととき存在感を放っています。



◀象限電気計
(旧制長岡高等工業学校)
[Max Kohl Chemnitz製]

電位を与えたときの象限間での微細な電位差や電荷量を測定する機器で、大正15年3月31日に316円で購入した記録があります。歴史的にはキュリー夫人が放射線の電離作用を測定するため、当時開発されたばかりのこの機器を使用したとされています。



これらの実験機器は、新潟大学史および科学史の上で貴重な資料であることはもちろん、大正～昭和初期の精緻な職人技や工業デザインについても目で見て知ることができます。

実験機器を展示している棚や室内の机・椅子は旧制長岡高等工業学校で使用されていたものです。また、同校の初代校長がヨーロッパ出張中に購入したドイツ製の大時計も展示しています。旧制高等学校時代のレトロな雰囲気をぜひお楽しみください。

令和3年度 あさひまち展示館 活動記録

● 企画展示

期 間	タイトル	展示室	担 当
2021.6.19～8.22	日本酒学展	企画展示室	旭町学術資料展示館
2021.7.21～8.29	「殻」展	1 階展示室	理学部
2021.9.18～10.24	甦る山古志の民具	企画展示室	人文学部
2021.11.13～12.19	新潟の赤いオーロラ	企画展示室	教育学部
2022.1.8～2.12	中村恭子日本画作品展「書割少女」	企画展示室	旭町学術資料展示館
2022.2.19～4.3	めでたい形 -あさひまち展示館のひなまつり-	企画展示室	教育学部



● イベント

日 時	タイトル	会 場
2021.6.18	旭町学術資料展示館リニューアルセレモニー	旭町学術資料展示館



※ リニューアルオープンについては前号をご覧ください。

● 資料貸出記録

貸 出 先	貸出資料名	貸出目的
新潟市会津八一記念館	会津八一書「病理学教室看板・拓本」	「会津八一『学規』と教育」展 (会期：2021.7.6～9.23)
なじょもん	飯綱山27号墳出土 銅釧・高坏、同65号墳出土 鉄剣・銅鉾・鉄族・鉈・鉋 (人文学部考古学研究室所蔵)	「魚沼地方の古代 —山里のなりわいと交流—」展 (会期：2021.9.4～11.3)
新潟県埋蔵文化財センター	牡丹山諏訪神社古墳出土 短甲片・円筒埴輪・土製勾玉・須恵器 (人文学部考古学研究室所蔵)	「倭国大乱 ～律令国家成立までの越後平野」展 (会期：2021.9.14～12.12)

令和3年度 あさひまち展示館 入館者数

● 入館者数 (2021年4月～2022年3月)

月	学 内			学 外			計
	学 生	教職員	その他	学 生	教職員	一 般	
2021年4月	—	—	—	—	—	—	—
5月	—	—	—	—	—	—	—
6月	14	21	0	3	0	88	126
7月	77	35	0	74	0	176	362
8月	41	29	0	124	4	253	451
9月	14	20	0	3	0	37	74
10月	38	22	1	8	3	237	309
11月	12	19	2	8	1	134	176
12月	10	14	0	0	6	131	161
2022年1月	0	13	3	1	19	191	227
2月	13	27	0	1	10	298	349
3月	3	17	0	5	2	231	258
計	222	217	6	227	45	1,776	2,493

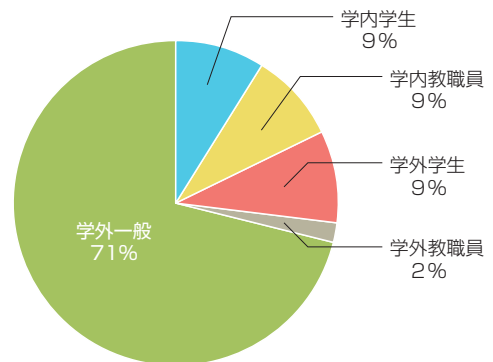
※開館日：水～日曜日の週5日間 4/1～6/18 改修工事のため臨時休館
9/8～9/16 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため臨時休館

● 団体入館者

日 付	団体名	人 数
2021.10.16	えんでこ	26名
2021.10.27	にいがた市民大学 「ミュージアムから見た新潟」	17名

● 講義・実習等での活用

日 付	講義・実習名	受講者数
2021.7.3	放送大学新潟学習センター面接授業 「われらの地球」	32名
2021.7.17	地学実験A	18名
通 年	博物館見学実習	50名





新潟大学旭町学術資料展示館ニュースレター

あさひまち

第20号



■ ISSN 2185-7431

■ 発行年月日 2022年6月15日

■ 編集・発行 〒951-8122 新潟市中央区旭町通2番町746 新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館

■ 印刷 富士印刷株式会社

新潟大学
旭町
学術資料
展示館
Niigata University
Asahimachi Museum

編集後記

令和3(2021)年度は6月のリニューアルオープン後、6つの企画展を開催しました。来館者の皆様には感染症対策へのご協力ありがとうございました。12月1日には、開館20周年を迎えました。開館当初から当館の活動を支えてくださっている「あさひまち展示館友の会」の皆様には心から感謝申し上げます。今後も人と作品、人とモノ、人と人を繋ぐ場でありたいです。

リサイクル適性
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。